

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 『竹取物語』と漢詩文：竹と月の結びつき

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 本間, 悠子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00001581">https://doi.org/10.57529/00001581</a>

# 『竹取物語』と漢詩文—竹と月の結びつき—

The Relationship between *The Tale of Taketori* : on Bamboo and Moon

本間悠子

キーワード：『竹取物語』 『白氏文集』 『和漢朗詠集』 竹 月

关键词：《竹取物語》 《白氏文集》 《和漢朗詠集》 竹 月

## 要旨

『竹取物語』における竹と月の関連性について、特に漢詩文に注目して考察する。竹から生まれたかぐや姫が、最後は月へ帰るといような竹と月を結びつける発想には、何か典拠があるのではないだろうか。『万葉集』に収められた竹取翁歌からは、『竹取物語』に繋がるような竹と月の結びつきは認められず、『万葉集』全体からも確認することはできない。また、『竹取物語』の素材として羽衣説話や嫦娥奔月の故事、竹から子どもが生まれる夜郎国の伝説などが知られているが、どの類型にも竹と月がともに描かれているものはない。そこで、竹と月がともに描かれている資料として漢詩文に目を向けたい。『白氏文集』と『和漢朗詠集』の中から『竹取物語』成立以前に詠まれたと考えられる漢詩を調べた結果、竹と月をともに詠んだ作品が確認できる。さらに、竹と月が別れを象徴し、離別の悲しさや侘しさを引き立てるものとして描写されている漢詩もあり、愛する者との別れが描かれる『竹取物語』の内容を想定させるようなものである。このように、『竹取物語』での竹と月を結びつけるような発想には、漢詩文からの影響を認めることができるのである。

## 摘要

本文旨在考察有关《竹取物语》中竹与月的关联性，尤其是分析其在汉诗中所存在的关联性。由从竹子中诞生的辉夜姬，最后回到月亮上的故事，所延伸出的竹与月的关系的设想，是否有什么踪迹可寻呢？在《万叶集》所收录的有关竹取老翁的和歌中，未发现可以体现出与《竹取物语》中所描述的竹与月关系的诗句，而在整个《万叶集》也找不到与之关联性相似的诗句。而《竹取物语》创作的来源有羽衣传说和嫦娥奔月的故事，以及在古夜郎国也曾流传过的竹子中生出小孩的故事，虽广为人知，但无论哪种故事版本都没有体现出竹与月的关系。鉴于此，本文将研究的对象限定为汉诗中的对竹与月关系描述的诗句。在《白氏文集》及《和汉朗咏集》中，查询《竹取物语》成书之前的汉诗中的描写，均能发现吟咏竹与月关系的词句。在汉诗中还能找到有关竹与月作为离别的象征，来带给人们无尽的悲伤以及寂寞等词句，这也不尽让人想起了，描写与喜欢的人分离的《竹取物语》中的故事情节。本文将基于《竹取物语》中竹与月关系的描写进行研究分析，浅谈汉诗对《竹取物语》所造成的影响。

## はじめに

本論文では、『竹取物語』における〈竹〉と〈月〉の関連性について考察する。かぐや姫が〈竹〉から誕生し、〈月〉へと昇天する場面は、どちらも『竹取物語』において印象的な場面である。このように〈竹〉から生まれたかぐや姫が、最後は〈月〉へ帰るといのように、〈竹〉と〈月〉を結びつけるような発想には、何か典拠がある可能性があるのではないだろうか。『万葉集』には竹取の翁と九人の娘子との歌の贈答があるが、『竹取物語』に繋がるような竹と月の結びつきは認められず、『万葉集』全体からもそのような和歌を確認することはできない。また、『竹取物語』の素材として、天の羽衣をまもって天女が空へと帰っていく羽衣説話<sup>(1)</sup>や、嫦娥が不死の薬を持ち出して月へと逃げたという故事<sup>(2)</sup>、二章でも取りあげる竹から子どもが生まれる夜郎国の伝説などが知られているが、どの類型にも〈竹〉と〈月〉がともに描かれているものはない。そこで、〈竹〉と〈月〉がともに描かれている資料として漢詩文に目を向けたい。『竹取物語』における〈竹〉と〈月〉を結びつけるような発想について、竹と月が描かれた漢詩文に注目して考察する。『白氏文集』と『和漢朗詠集』の中から『竹取物語』成立以前に詠まれたと考えられる漢詩を調べた結果、〈竹〉と〈月〉をとともに詠んだ作品が確認できた。さらに、〈竹〉と〈月〉が別れを象徴し、離別の悲しさや侘しさを引き立てるものとして描写されている漢詩もあり、愛する者との永遠の別れが描かれる『竹取物語』の物語内容を想定させるようなものであ

(1) 羽衣説話 西欧では白鳥処女説話として知られ、アジアでもインドから東南アジア・中国・朝鮮半島と幅広く分布する、最も世界的な広がりをもつ説話の一つである。わが国でも早くから古書にみえ、民間では天人女房の昔話として広く流布している。その一般型は、(1)ある男が水浴している天女の羽衣を見出し、羽衣を盗む、(2)天女は天に帰ることができず、男の妻となる（そして多くの場合二、三人の子を生ず）、(3)のちに天女は羽衣を発見し、天へ帰る、(4)男は天女の後を追って天へ昇る、というものである。

（『日本伝奇伝説大事典』「羽衣説話」項、708頁。角川書店、1986年）

(2) 以下に、『淮南子』に見られる嫦娥奔月の故事を引用する。

譬若羿請不死之藥於西王母，姮娥竊以奔月，張然有喪，無以續之。

<通釈>譬えば、羿が不死の仙薬を西王母に請うけたところ、妻の嫦娥がそれを盗み出して月に逃げた。羿はこれを追いかけるでもなく、ただがっかりして茫然自失するのみであったようなもので、(後略)

(新釈漢文大系『淮南子』上、317～318頁。明治書院、1979年)

た。このように、『竹取物語』での〈竹〉と〈月〉を結びつけるような発想は、漢詩文からの影響も反映しているのである。

## 1. 『万葉集』の竹の歌

まず、日本最古の和歌集である『万葉集』から確認する。『万葉集』には、竹取の翁と九人の娘子との歌の贈答が収められている。以下に、その題詞を引用する。

〔A〕 竹取の翁、偶に九箇の神女に逢ひ、近づき狎れぬる罪を贖ひて作る歌一首併せて短歌

昔老翁あり、号を竹取の翁といふ。この翁季春の月に、丘に登り遠く望す。忽ちに羹を煮る九箇の女子値ひぬ。百の嬌は儁なく、花の容は匹なし。ここに娘子等、老翁を呼び嗤ひて曰く、「叔父来れ、この燭火を吹け」と言ふ。ここに翁唯唯といひて、漸くに趣き徐に行き、座の上に着接きぬ。良久にして、娘子等皆共に笑みを含み、相推譲めて曰く、「阿誰かこの翁を呼びつる」と言ふ。すなはち竹取の翁謝まりて曰く、「非慮る外に、偶に神仙に逢ひぬ。迷惑ふ心、敢へて禁むる所なし。近づき狎れぬる罪は、希はくは贖ふに歌を以てせむ」といふ。即ち作る歌一首併せて短歌

(新編日本古典文学全集『萬葉集』④卷一六・三七九一・作者未詳)

ここでは、「竹取の翁」という名前が見られるだけで、竹と月の結びつきは認められない。題詞に続く長歌・短歌でも同様である。また、『万葉集』全体には、竹を詠んだ歌が約二〇首収められている。そのうち「さす竹の」「なよ竹の」といった枕詞や「竹玉」などの竹製品、比喩的に竹が用いられているものではなく、景物としての竹そのものを詠んだ和歌は三首であった。以下に、その三首を引用する。

〔B〕 竹を詠んだ和歌

①梅の花散らまく惜しみ我が園の竹の林にうぐひす鳴くも

(新編日本古典文学全集『萬葉集』②卷五・八二四・少監阿氏奥島)

②み苑生の竹の林にうぐひすはしき鳴きにしを雪は降りつつ

(同④卷一九・四二八六・作者未詳)

③我がやどののいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも

(同④卷一九・四二九一・大伴家持)

①は梅の花が散るのを惜しんで、竹の林で鶯が鳴いていると詠む。②は宮中の竹の林に鶯はしきりに鳴いていたが、(今は)雪が降り続いているという情景を詠む。③はわずかな群竹に吹く風の音が、かすかにしている夕べであると詠む。①②③の和歌からも竹と月の結びつきは認められず、『万葉集』全体からも『竹取物語』と繋がるような竹と月の関連性を見つけることはできなかった。

けれども、一度『竹取物語』本文から離れ『竹取物語』の原型や典拠に目を向けた場合、かぐや姫と竹との繋がりが見えてくる。竹の姿を詠んだ①②③の三首のうち、①②の二首に竹と鶯が詠まれている。②は鶯がしきりに鳴いていた竹の林に(今では)雪が降り続いていると、竹と鶯を同じ場面で詠んでいるわけではないが、かつて竹林で鶯が鳴いていたと解釈できることから、これも竹と鶯の取り合わせであると捉えることができる。竹と鶯という取り合わせについて、参考として橘純一氏の論文を紹介する。橘純一氏は『海道記』にみえる竹取伝説<sup>(3)</sup>、すなわち鶯姫の説話こそが『竹取物語』の原型の重要部分を保存しているという視点から、『竹取物語』のかぐや姫が竹から生まれた由縁に

---

(3) 以下に、『海道記』に収められた竹取説話の冒頭を引用する。

昔、採竹の翁と云ふ者ありけり。女を、かぐや姫と云ふ。翁が宅の竹 林に、鶯の卵、女形にかへりて巢の中にあり。翁、養ひて子とせり。ひととなりて、かほよき事比ひなし。光ありて傍らを照らす。婢媚たる両鬢は秋の蟬の翼、宛転たる双蛾は遠山の色、一たび咲めば百の媚なる。見聞の人は、みな腸を断つ。この姫は、先生に人として翁に養はれたりけるが、天上に生れて後、宿世の恩を報せむとて、暫くこの翁が竹に化生せるなり。憐むべし、父子の契の他生にも変ぜざること。是よりして、青竹の節の中に黄金出来して、貧翁忽ちに富人と成りにけり。その間の英華の家、好色の道、月卿光を争ひ、雲客色を重ねて、艶言をつくし、懇懐を抽きいづ。常に、かぐや姫が家屋に来会して、絃を調べ、歌を詠じて遊びあひたりけり。されども、翁姫、難詞を結びて、より解くる心なし。

(新編日本古典文学全集『中世日記紀行集』51～52頁。1994年)

ついて、以下のように述べている。

「羽衣」「籠に入れて養ふ」の二点からしても、この物語のかぐや姫は、鳥而も小鳥の本体を彷彿し来る説明可能性を相当持つてゐると思ふ（中略）俗に「梅に鶯、竹に雀」といふが、それは比較的近世のことで、平安朝ではむしろ「竹に鶯」とも言ひ得るほどに、鶯は竹林に棲むと考へられたらしい。（中略）梅は鶯の來鳴くもの、竹林は鶯の常住の所と考へられたのであらうと思ふ。されば、鶯姫誕生の所としては竹林が一番適當であると考へるのである。（『かぐや姫は何故竹から生れたか』『国文学解釈と鑑賞』二—四、一九三七年四月）

つまり、かぐや姫が鶯の卵から誕生する竹取説話にこそ『竹取物語』の原型があるとすると、かぐや姫イコール鶯姫であり、鶯（姫）が生まれる場として竹（林）が最も適當であると言えるのである。『万葉集』からは、竹と月の組み合わせを見つけることはできなかったが、竹と鶯という取り合わせが『万葉集』で竹の姿を詠んだ和歌三首のうち二首にあることは、『海道記』などに見られる（竹林の）鶯の卵からかぐや姫が生まれたとする竹取説話と関係があるといえるだろう。

『万葉集』には、〈竹〉と〈月〉を共に詠んでいる歌や、〈竹〉と〈月〉を結びつけるような発想は見られなかった。けれども、〈竹〉と鶯の取り合わせがいくつか見られた。〈竹〉と鶯という取り合わせは、鶯の卵からかぐや姫が誕生したと伝える竹取説話との関連が指摘できるだろう。

## 2. 竹から人が出生する話

竹から人間が出生する話など、竹にまつわる民間伝承が中国から東南アジアにかけて、竹が生い茂る様子が見られる地域では多く存在していることは先行研究で指摘されている<sup>(4)</sup>。竹から人間が生まれるモチーフの典拠として、

(4) 松本信廣「竹中生誕譚の源流」（『史学』25-2、1951年11月）、沖浦和光『竹の民俗誌』（岩波書店、1991年）など。

契沖は『広大宝楼閣善住秘密陀羅尼經』と『後漢書』「西南夷伝」などに見られる夜郎国の伝説を挙げ、田中大秀は夜郎国の伝説が『華陽国志』にも見られることを指摘している。以下に、その三例を紹介する。

〔C〕竹から生まれる人

① 『広大宝楼閣善住秘密陀羅尼經』「序品」

時彼仙人得法歛喜欣慶踊躍。於其住處醍醐消没於地即於處而生三竹。七賽為根金莖葉竿。梢枝之上皆有真珠。香潔殊勝常有光明。往來見者靡不欣悅。生滿十月弁便自裂破。一一竹内各生一童子。顔貌端正色相成就。

(『大正新脩大藏經』第一八卷、大正一切經刊行会、一九二八年。一〇〇六頁)

<口語訳>仙人は法を得ると躍り上がって喜んだ。その住まいで命を絶つと、その躰は大地に醍醐(乳を精製して作られるもの)が溶けるようにして消えていき、その消えた場所には三本の竹が生えた。その竹の根は七賽(七)でできていて、莖と葉と竿は金でできていた。梢の上には真珠が置かれている(その竹は)かぐわしい香りがして常に明るく輝いていた。これを見て喜ばないものはいない。その竹が成長して十ヶ月が経つと、自ら裂けてそれぞれの竹の中から容貌の整った童子が生まれた。

② 『後漢書』「西南夷伝」

夜郎者、初有女子浣於遼水、有三節大竹流入足間、聞其中有號聲、剖竹視之、得一男兒。歸而養之。及長、有才武、自立為夜郎侯、以竹為姓。

(『後漢書』一〇、臺灣中華書局、一九六五年。二八四四頁)

<口語訳>夜郎国の始まりは、ある女性が遼水で洗い物をしていると、節が三つある竹が流れてきて足の間に入った。その竹の中から泣き声が聞こえるので、割って中を見ると男の子がいた。女性は、その子を連れて帰り育てた。男の子は武勇に優れ、自ら竹の姓を名

乗り夜郎国の王となった。

③ 『華陽国志』 南中志

有竹王者、興於遼水。有一女子浣于水濱。有三節大竹流入女子足間、推之不是肯去、聞有兒聲。取持歸破之、得一男兒。長養有才武、遂雄夷狄、氏以竹為姓。捐所破竹于野、成竹林、今竹王祠竹林是也。

（『新編漢魏叢書』 孝元帝撰鷺江出版社、二〇一三年。三二二頁）  
〈口語訳〉竹の王は、遼水から興った。ある女が遼水のほとりで洗物をしていた。節が三つある大きな竹が流れてきて女の足の間に入ったのだが、その竹は流れに押しやっても去らずに押しやっても去らず、（竹の中から）赤ん坊の声が聞こえた。女は竹を家に持って帰りそれ割ってみると、竹の中から男児が生まれた。この子どもは成長すると文武に優れ、蛮族達を追い出すと竹の姓を名乗るようになった。（子どもが生まれた時に）割った竹を捨てた野原は竹林になり、今はそこに竹の王の祠が建っている。

『竹取物語』成立以前に書かれたと考えられる国内の資料で、竹から人間が生まれるような説話や伝説は、現在のところ発見されていない。夜郎国に代表される竹から男子が出生し王や一族の始祖となる物語など、大陸に伝わる竹中生誕譚を受けて、『竹取物語』でもかぐや姫は竹から生まれたのかもしれない。

『竹取物語』より前の作品で竹から人間が生まれるという説話や伝説は、日本国内の資料からは発見されていない。中国に伝わってきたいくつかの竹の中から人間が生まれるという話の影響を受けて、『竹取物語』でもかぐや姫が竹から生まれるという発想に至った可能性がある。

### 3. 竹と月が詠まれた漢詩

『竹取物語』の素材と考えられるものとして、『万葉集』に詠まれた竹の歌や、漢籍に見られる竹から人が生まれる話を紹介したが、これらから竹と月の結びつき確認することはできなかった。また、『竹取物語』の素材として、天の羽

衣を纏って最後には天女が空へと帰っていくという羽衣説話・白鳥処女説話、月へ昇る女性のモチーフとして西王母のもとから不死の薬を持ち出して月へと逃げたという嫦娥の伝説などが知られているが、どの類型にも竹と月が表れているものは無かった。そこで、『竹取物語』の素材研究ではあまり注目されてこなかった漢詩文にも目を向けたい。『竹取物語』が成立するよりも前、平安初期の九世紀前半嵯峨朝の時代は唐風文化の全盛期であり、嵯峨天皇を中心として漢詩が盛んに作られた。漢詩における月の描写と『竹取物語』における月の描写の関連が先行研究<sup>(5)</sup>で指摘されるように、竹と月を結びつける典拠も漢詩文の中にあるのではないだろうか。そこで、日本で詠まれた漢詩の資料として『和漢朗詠集』、中国で詠まれた漢詩として『白氏文集』を見ていく。

まず、日本で詠まれた漢詩について『和漢朗詠集』を確認する。『和漢朗詠集』には竹を詠んだ詩歌が二〇編収められている。そのうち、竹と月が共に詠まれているものが三編あった。以下に、その三編を引用する。

[D] 日本で詠まれた作品『和漢朗詠集』

- ① 西桜月落花間曲 中殿灯残竹裏音 (西桜に月落ちて花の間の曲 中殿に灯残つて竹の裏の音)

(新編日本古典文学全集『和漢朗詠集』巻上・春鶯・七一・菅原文時〈八九九～九八一〉)

- ② 第一傷心何処最 竹風鳴葉月明前 (第一に心を傷ましむることは何れの処か最なる 竹風葉を鳴らす月の明らかなる前)

(同巻上・秋興・二二六・島田忠臣〈八二八～八九二〉)

- ③ 阮籍嘯場人歩月 子猷看処鳥栖煙 (阮籍が嘯く場には人月に歩む 子猷が看る処には鳥煙に栖む)

※阮籍嘯場…竹林の七賢人の一人、阮籍がよく詩を吟じたという竹林。

(同巻下・竹・四三一・章孝標〈生没年未詳。八一九年に進士に及第する〉)

(5) 奥津春雄「中秋明月と『竹取物語』」(『早稲田実業学校研究紀要』4、1969年12月)、滝沢綾子「『竹取物語』における月」(『長野国文』16、2008年3月)など。

①は宮中の西桜に月が落ち、花の影や呉竹の茂みからは鶯のさえずりが聞こえてくると詠む。②は竹が風にそよいで葉を鳴らし月光がその辺りを明るく照らしている光景が、秋の感傷に心を揺り動かされる場所として最高であると詠む。③はその昔阮籍が詩を吟じたという竹林で、今でも人が月影を踏みながら歩いているという様子を詠む。『和漢朗詠集』の成立は『竹取物語』よりも後のことであるが、①②③の作者はいずれも八〇〇年代の人物であることが確認できる。また③の作者は中国人であるが、①②の作者は日本人である。このように竹と月を素材として組み合わせる発想は、『竹取物語』より先に日本にもあったようである。

次に、『白氏文集』を取り上げる。『白氏文集』は中国の漢詩集であるが、『竹取物語』成立以前に渡来し当時の貴族達からも愛好されてきた。また、『竹取物語』の月の描写は白居易の詩からヒントを得ているという指摘も多くなされてきた<sup>(6)</sup>。竹を愛した白居易は、竹を題材にした詩をいくつも読んでいる。『白氏文集』に収められた漢詩の中から、竹と月の取り合わせと考えられるものを九編、以下に引用する。

〔E〕 中国で詠まれた作品『白氏文集』

- ④ 禁中寓直 夢遊仙遊寺 (禁中に寓直し、夢に仙遊寺に遊ぶ)  
 西軒草詔暇 松竹深寂寂(西軒詔を草する暇、松竹深うして寂寂たり。)  
 月出清風來 忽似山中夕 (月出でて清風來たり、忽として山中の夕べに似たり。)  
 因成西南夢 夢作遊仙客 (因つて西南の夢を成し、夢に遊仙の客と作る。)  
 覺聞宮漏声 猶謂山泉滴 (覺めて宮漏の聲を聞けば、猶ほ山泉の滴るか)

(新釈漢文大系『白氏文集』卷第五・閑適一・二〇四。六七頁)

(6) 静永健「月を仰ぎ見る妻へ—白居易下邳贈内詩考—」(『九州中国学会報』43, 2005年5月)、倪錦丹「竹取物語の物語性—「月」をめぐる—」(『大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」活動報告書」平成20年度 海外教育派遣事業編、2009年3月)など。

- ⑤ 題小橋前新竹招客 (小橋前の新竹に題して客を招く)
- 雁齒小紅橋 板檐低白屋 (雁齒の小紅橋、板檐の低白屋。)
- 橋前何所有 萋萋新生竹 (橋前何の有る所ぞ、萋萋たる新生の竹。)
- 皮開拆褐錦 節露抽青玉 (皮開けて褐錦を拆き、節露れて青玉を抽く。)
- 筠翠如可澹 粉霜不忍觸 (筠翠澹らふ可きが如く、粉霜觸るるに忍びず。)
- 閑吟聲未已 幽翫心難足 (閑吟聲未だ已まず、幽翫心足り難し。)
- 管領好風烟 輕欺凡草木 (好風烟を管領し、凡草木を輕欺す。)
- 誰能有月夜 伴我林中宿 (誰か能く月有る夜、我に伴うて林中に宿せん。)
- 爲君傾一盃 狂歌竹枝曲 (君が爲に一盃を傾け、竹枝の曲を狂歌せん。)

(同『白氏文集』卷第八・閑適四・三六五。三九九～四〇〇頁)

- ⑥ 竹窓 (竹窓)
- 嘗愛輞川寺 竹窓東北廊 (嘗て愛す輞川の寺、竹窓東北の廊。)
- 一別十餘載 見竹未曾忘 (一たび別れて十餘載、竹を見れば未だ曾て忘れず。)
- 今春二月初 卜居在新昌 (今春二月の初め、居を新昌に卜す。)
- 未暇作廡庫 且先營一堂 (未だ廡庫を作るに暇あらず、しばらく一堂を營む。)
- 開窓不糊紙 種竹不依行 (窓を開きて紙を糊せず、竹を種ゑて行に依らず。)
- 但取北簷下 窓與竹相當 (但だ北簷の下、窓と竹と相當たるを取る。)
- 繞屋聲淅淅 逼人色蒼蒼 (屋を繞りて聲淅淅たり、人に逼りて色蒼蒼たり。)
- 煙通杳靄氣 月透玲瓏光 (煙は杳靄の氣を通し、月は玲瓏の光を透す。)
- 是時三伏天 天氣熱如湯 (是の時三伏の天、天氣熱きこと湯の如し。)
- 獨此竹窓下 朝迴解衣裳 (獨り此の竹窓の下、朝より迴りて衣装を

解く。)

輕紗一幅巾 小簾六尺牀 (輕紗一幅の巾、小簾六尺の牀。)  
無客盡日靜 有風終夜涼 (客無くして盡日靜かに、風有りて終夜涼し。)  
乃知前古人 言事頗諳詳 (乃ち知る前古の人、言事頗る諳詳す。)  
清風北窓臥 可以傲羲皇 (清風北窓に臥し、以て羲皇に傲す可し。)  
(同『白氏文集』卷第一一・感傷三・五六九。七一二～七一三頁)

⑦ 山鷓鴣 (山鷓鴣)

朝朝夜夜啼復啼 (朝朝夜夜、啼きて復た啼く、)  
啼時露白風淒淒 (啼く時露白く風淒淒たり。)  
黃茅岡頭秋日晚 (黃茅岡頭に秋日晚れ、)  
苦竹嶺下寒月低 (苦竹嶺下に寒月低る。)  
畚田有粟何不啄 (畚田に粟有り何ぞ啄まざる、)  
石楠有枝何不棲 (石楠に枝有り何ぞ棲まざる。)(後略)  
(同『白氏文集』卷第一二・感傷四・五九〇。七七一頁)

⑧ 同錢員外禁中夜直 (錢員外と共に禁中に夜直す)

宮漏三聲知半夜 (宮漏三聲半夜を知らん、)  
好風涼月滿松筠 (好風涼月松筠に滿つ。)  
此時間坐寂無語 (此の時間坐すれば寂として語無く、)  
藥樹影中唯兩人 (藥樹影中唯だ兩人のみ。)

※松筠…松と竹。筠は竹の青皮。

(同『白氏文集』卷第一四・律詩・七二二。一一七頁)

⑨ 題盧祕書夏日新栽竹二十韻 (盧祕書が夏日新たに栽ゑし竹に題す二十韻)

湘竹初封植 盧生此考槃 (湘竹初めて封植し、盧生此に考槃す。)  
久持霜節苦 新託露根難 (久しく霜節の苦みを持し、新たに露根の

- 難きを託す。) 等度須當砌 疏稠要滿欄 (等しく度りて須く砌に當つべく、疏稠欄に満たさんことを要す。)
- 買憐分薄俸 栽稱作閨官 (買ひて薄俸を分かつみを憐み、栽ゑて閨官と作るに稱ふ。)
- 葉翦藍羅碎 莖抽玉瑀端 (葉は藍羅の碎を翦り、莖は玉瑀の端を抽き、)
- 幾聲清淅瀝 一簇綠檀欒 (幾聲か清くして淅瀝たり、一簇して綠檀欒たり。)
- 未夜青嵐入 先秋白露團 (未だ夜ならざるに青嵐入り、秋に先だちて白露團なり。)
- 拂肩搖翡翠 熨手弄琅玕 (肩を拂つて翡翠を搖かし、手を熨して琅玕を弄す。)
- 韻透窗風起 陰鋪砌月殘 (韻透りて窗風起り、陰鋪きて砌月殘る。)
- 炎天聞覺冷 窄地見疑寬 (炎天にも聞けば冷ややかなるを覺へ、窄地も見れば寬きかと疑はる。)
- 梢動勝搖扇 枝低好掛冠 (梢動きて扇を搖かすに勝り、枝低れて冠を掛くるに好し。)
- 碧籠煙幕幕 珠灑雨珊珊 (碧籠めて煙幕幕たり、珠灑ぎて雨珊珊たり。)
- 晚籟晴雲展 陰芽蟄虺蟠 (晚籟晴雲展べ陰芽蟄虺蟠る。)
- 愛從抽馬策 惜未截魚竿 (愛しては馬策を抽くに從せ、惜しんでは未だ魚竿を截らず。)
- 松韻徒煩聽 桃夭不足觀 (松韻徒に聽を煩はし、桃夭觀るに足らず。)
- 梁慙當家杏 臺陋本司蘭 (梁は當家の杏を慙かしめ、臺は本司の蘭を陋とす。)
- 撐撥詩人興 勾牽酒客歡 (詩人の興を撐撥し、酒客の歡を勾牽す。)
- 靜連蘆簟滑 涼拂葛衣單 (靜は蘆簟の滑なるに連なり、涼は葛衣の單なるを拂ふ。)
- 豈止消時暑 應能保歲寒 (豈に止だ時暑を消すのみならんや、應に

能く歳寒を保つべし。)

莫同凡草木 一種夏中看 (凡草木と同じく、一種夏中に看る莫れ。)  
(同『白氏文集』卷第一五・律詩・八〇九。二二七頁～二二八頁)

⑩ 對琴待月 (琴に對して月を待つ)

竹院新晴夜 松窓未臥時 (竹院新たに晴るる夜、松窓未だ臥せざる時。)

共琴爲老伴 與月有秋期 (琴と共に老伴と爲り、月と與に秋期有り。)  
玉軫臨風久 金波出霧遲 (玉軫風に臨むこと久し、金波霧より出づること遅し。)

幽音待清景 唯是我心知 (幽音清景を待つ、唯だ是れ我が心に知る。)  
(同『白氏文集』卷五六・律詩・二六一九。五六九頁)

⑪ 池上即事 (池上の即事)

移牀避日依松竹 (牀を移し日を避けて松竹に依り、)

解帶當風掛薜蘿 (帶を解き風に當たり薜蘿を掛く。)

鈿砌池心綠蘋合 (鈿砌の池心に綠蘋合し、)

粉開花面白蓮多 (粉開の花面に白蓮多し。)

久陰新霽宜絲管 (久陰の新たに霽れて絲管に宜し、)

苦熱初涼入綺羅 (苦熱の始めて涼しく綺羅に入る。)

家醞瓶空人客絕 (家醞瓶は空にして人客は絶え、)

今宵爭奈月明何 (今宵争でか月明を奈何せん。)

(同『白氏文集』卷第六五・律詩・三二一八。三四三頁)

⑫ 江南喜逢蕭九徹因話長安舊遊戲贈五十韻 (江南にて蕭九徹に逢ふを喜び、因つて長安の舊遊を語り、戯れに五十韻を贈る)

(前略)

自我辭秦地。逢君客楚鄉。(我秦地を辭してより、君が楚郷に客た

- るに逢ふ。)
- 常嗟異岐路。忽喜共舟航。(常に嗟く岐路を異にするを、忽ち喜ぶ舟航を共にするを。)
- 話舊堪垂淚。思郷數斷腸。(舊を語りて涙を垂るるに堪へ、郷を思ひて數々斷腸す。)
- 愁雲接巫峽。淚竹近瀟湘。(愁雲巫峽に接す。淚竹瀟湘に近し。)
- 月落江湖闊。天高節候涼。(月落ちて江湖闊く、天高くして節候涼し。)
- 浦深煙渺渺。沙冷月蒼蒼。(浦深くして煙渺渺、沙冷かにして月蒼蒼。)
- 紅葉江楓老。青燕驛路荒。(紅葉江楓老い、青燕驛路荒る。)
- 野風吹蟋蟀。湖水浸菰蔣。(野風蟋蟀を吹き、湖水菰蔣を浸す。)
- 帝路何由見。心期不可忘。(帝路何に由つてか見ん、心期忘るべからず。)
- 舊遊千里外。往事十年強。(舊遊千里の外、往事十年強。)
- 春晝提壺飲。秋林摘橘嘗。(春晝壺携げて飲み、秋林橘を摘んで嘗む。)
- 強歌還自感。縱飲不成狂。(強歌して還た自ら感じ、縱飲狂を成さず。)
- 永夜長相憶。逢君各共傷。(永夜長く相憶ひ、君に逢うて各共に傷む。)
- 殷勤萬里意。并寫贈蕭郎。(殷勤なり萬里の意、并せ寫して蕭郎に贈る。)

(『白氏文集』格律詩。七七四頁)

『白樂天全詩集』(佐久節編、日本図書センター、一九七八年六月)

以上の④から⑫の漢詩の内容を略記する。

- ④ 松や竹が深く生い茂りひっそりとしている所に、月が出て爽やかな風が吹くと山中の夕暮れのような気持ちになる。
- ⑤ 月夜に客を招いて竹のために一杯傾けたい、誰か月が出た夜に私と連れ立ってこの竹林に泊まってくれないか。
- ⑥ 玲瓏たる月の光が窓の外に植えた竹林を抜けて差し込んでくと詠む。
- ⑦は竹の生い茂る山麓に寒々とした月光が低く漂っている。
- ⑧ 心地よい風と涼しげな月の光が、竹や松に満ちて実にすばらしい気分だ。

- ⑨ は竹の月影が庭一杯に広がると、庭の月光がちらちらとくずれ乱れる。
- ⑩ 晴れた夜に竹の中庭で、琴を前にして月が出るのを待っている。
- ⑪ 日差しを避け松や竹の林の側で涼んでいる折、家の酒は空になり賓客も絶えているのだが今宵の月夜はどう過ごすものか。
- ⑫ 秋の雲や湘竹の斑模様を見たり、月が傾いて秋風が身にしみたりするとより一層故郷が懐かしく思われるのだ。

以上のように、竹林に差し込む月の光を詠んだ⑥⑦⑧⑨など、竹と月を組み合わせる発想は『白氏文集』の中でもいくつか見られた。このように〈竹〉と〈月〉を素材としてともに情景を詠んだ漢詩は、『和漢朗詠集』から三編、『白氏文集』から九編確認できた。これらの漢詩は、〈竹〉から人が生まれる、〈月〉を見て女性が嘆く、〈月〉へと女性が帰っていくというように、『竹取物語』での〈竹〉や〈月〉の扱いと同一ではないが、『竹取物語』より先に〈竹〉と〈月〉をとともに扱うような発想の詩が詠まれていたことは軽視できない。

#### 4. 竹と月、別れを詠んだ漢詩

さらに、竹と月が共に描かれる情景には、別れに関わっているものもあった。以下に、竹でもって別れの情景を詠んだ漢詩をあげる。

##### 〔F〕 湘竹と別れの詩

江上送客

(江上に客を送る)

江花已萎絶 江草已消歇 (江花已に萎絶し、江草已に消歇す。)

遠客何處歸 孤舟今日發 (遠客何處にか歸る、孤舟今日發す。)

杜鵑聲似哭 湘竹斑如血 (杜鵑聲哭するに似たり、湘竹斑血の如し。)

共是多感人 仍為此中別 (共に是れ多感の人、仍ほ此中の別れを爲す。)

(『白氏文集』 卷一一・感傷三・五四〇。六六七頁)

※湘竹…紫色の斑模様がある竹。その斑模様は、舜帝が崩じた際、その後娥皇(湘君)とその妃女英(湘夫人)が後を追って

湘水（湖南省で瀟水と合流し、洞庭湖に注ぐ川）に身を投げた時に流した涙の跡だという。

これは、長江のほとりで旅人を見送った時の悲しさや寂しさを詠んだものである。この漢詩では、舜帝の妃娥皇とその妃女英が舜の死を嘆いて流した涙が竹にかかる、その竹は斑模様になったという伝説がある竹、湘竹を用いて（湘）竹が別れの悲しさや侘しさを引き立てる景物として描かれる。そして、湘竹と月を用いた例として、次のような漢詩があった。

〔G〕『和漢朗詠集』における竹と月、別れを詠んだ詩

竹斑湘浦 雲凝鼓瑟之蹤（竹湘浦に斑にして 雲鼓瑟の蹤に凝る）

鳳去秦台 月老吹簫之地（鳳秦台を去つて 月吹簫の地に老いたり）

※竹湘浦斑…湘水のほとりに生えている竹。湘竹と同じ。

※鼓瑟 …湘君と湘夫人が瑟を鳴らして楽しんだ場所。

※鳳去秦台…鳳に乗った簫史と、その妻弄玉（秦の穆公の女）が、その住いの鳳台（秦台）から飛び去ったという故事。その鳳台とは、かつて簫史が妻に簫を教えて鳳の鳴き声をさせると、鳳凰が舞い降りたので、穆公が二人のために建てた建物という。

（『和漢朗詠集』巻下・雲・四〇三・張誥〈生没年未詳。大中年間（八四七～八五九）に進士に及第したことが分かる〉）

〔G〕は〔F〕「江上送客」であげた湘竹にまつわる故事と、鳳に乗った簫史とその妻弄玉（秦の穆公の女）が、その住まいの鳳台（秦台）から飛び去ったという故事に拠って、湘君と湘夫人が瑟を鳴らして楽しんだ場には、雲が漂っているだけで、簫史と弄玉が笙を吹いて遊んだ場には、月の光が降り注ぐだけであると、雲や月は昔のままであるのに人事は遠い過去の時間の中に消えてしまったという侘しい情景を詠んだものである。

この漢詩は湘竹つまり竹だけでなく、月も共に用いることで、残された者たちの別れの悲しみや侘しさを引き立てている。この漢詩からも、竹と月が一つ

の情景の中で詠まれることが確認できるだろう。竹と月が別れや別れの悲しさ、侘しさを象徴するものとして詠まれていることは、〈竹〉から生まれたかぐや姫が〈月〉へと帰り、地上の者たちとの永遠の別れを経験するという『竹取物語』の内容との着想の重なりが認められるだろう。

〔D〕と〔E〕で紹介した竹と月がある景色を詠んだ漢詩、資料八で紹介した竹と月でもって別れの悲しみや侘しさを引き立てる漢詩などの影響も受けて、『竹取物語』でもかぐや姫が竹から生まれて月へと帰るという竹と月を結びつけるような発想が生まれたと考える。〔F〕「江上送客」と〔G〕「竹斑湘浦……」での湘竹は、湘竹にまつわる故事を用いることで別れの悲しみを象徴している。〔G〕「竹斑湘浦……」は、湘竹だけでなく〈月〉も用いることでさらに別離の悲しみや侘しさを引き立てているのである。このように〈竹〉から生まれたかぐや姫が〈月〉へと帰っていくということは、竹取の翁達といった愛する人々との永遠の「別れ」を暗示させるという点で、『竹取物語』との着想の重なりが認められる。

## おわりに

以上、本論文では『竹取物語』における〈竹〉と〈月〉を結びつけるような発想について、特に漢詩文に注目をして考察を行った。『白氏文集』と『和漢朗詠集』に収められた漢詩のうち、『竹取物語』成立以前に詠まれたものを対象として考察した結果、〈竹〉と〈月〉をともに素材にして情景を詠んだものがいくつか見られた。さらに、〈竹〉と〈月〉が別れを象徴し、悲しさや侘しさを引き立てるものとして描写されている漢詩があり、『竹取物語』での竹取の翁達、愛する者たちとの永遠の別れを経験するかぐや姫との重なりも見えてくるのである。

従来の研究では、『竹取物語』のモチーフは神仙思想や仏教など大陸文化に由来していると説くものが多いが、それらに加え今回取り上げたような漢詩文の影響もあって、『竹取物語』での〈竹〉と〈月〉を結びつけるような発想が生まれたと考えられる。

